

オリンピック招致と東京プロブレムの克服



屋井鉄雄
論説委員
東京工業大学大学院
総合理工学研究科 教授

この拙稿が学会誌に掲載される頃には、2020年のオリンピック開催地も決定されているだろう。東京であればそれで結構だが、そうでないとしても落胆せずに、次に向け準備を始めて欲しい。東京という少々ローカルな話題だが、時節柄お許し頂き自由に述べたい。今回は落選した前回より多少機運は高くとも、広がりがある一歩の感がする。しかし、東京開催と言うなら、国民的な関心と関与を高めるため、東京だけのお祭りにしない最大限の工夫を期待したい。商標等の制約を踏まえつつも地方の自治体等とのコラボを進め、愚見だが江戸時代の旧藩に縁のある道や場所を地元と連携してイベントの場とするなど、この機会に被災地を含む全国の地方の魅力を東京から発信できれば意義も高まるだろう。

一方、東京開催を逸したのなら、これを首都東京がさらに飛躍する好機と捉えたい。オリンピックは一過性だが、その機会に都市の魅力を高めるのは常である。11年後の2024年なら、東京を安全で競争力の高い魅力的な都市に近づけることは不可能ではない。2024年は1964年の東京オリンピックから60年。人間でいえば還暦を迎える年である。オリンピックに合わせて整備され、既に老朽化したインフラの計画的更新を完遂し、東京の安全性を高めるのに格好のタイミングである。すべての事業は間に合わなくても、全体像と道筋を明確にすることで国際社会での安心感を高められるだろう。

東京オリンピック直後の1966年には成田空港や東京外郭環状道路の反対運動など、深刻な社会問題が続発し、空も陸もその後長きに亘って未完の社会資本を余儀なくされてきた。行政や地元の関係者の長年の努力によって、地域の課題を残しつつも所謂タブーと称される問題構造を克服してきたが、これらの影響は多方面に及び、東京は翼をもがれた姿のまま、他の世界都市に比肩する競争を生き抜いてきたとも言えよう。

しかし、東京には未だにタブーのごとき課題がある。たとえば横田空域である。2年前に嘉手納空域が日本に完全返還されたが、東京の空はその多くが未だ米軍の管理下に置かれている。また、羽田空港ではロンドンやニューヨークなどで行われる市街地上空の離着陸を経路として利活用していない。高速道路や鉄道についても課題は残る。パリでも全通させた外環状道路について、東京では昨年東名高速までが着工されたが、長い間凍結されていたため東名以南の議論は手つかずにある。鉄道では、国際空港へのアクセスでも財源負担や関係者合意などの課題から長い間検討に留まっているし、縄張りのような権利意識が立ち上がることもある。地上の一般道路では、自転車の歩道通行を長らく放置してきたため、近年、国は自転車の車道利用に舵を切ったが、計画決定後に多

年を要する整備の現場では容易に転換できない苦悩もみえる。

さて、このような現実の中で、2024年にオリンピックを招致するなら、半世紀以上前に生じ、今も未決着の懸案やタブーの類に一定程度けじめを付け、それらを乗り越えて未来に踏み出すタイミングとすべきではないだろうか。世界都市のランキングではパリの後塵を拝す東京であるが、そのパリは前回のオリンピック開催から2024年で100年が経つという。前回開催から還暦を迎える東京が、パリを凌ぐ世界都市づくりを目指して、世紀開催のパリと競って欲しいものだ。もちろん、オリンピックは事業実施のタイミングの1つに過ぎない。招致の時期とは別に、国と都とで理念をきっちり共有し、新しい首都改造計画を作り、それを国民に伝えて共有の輪を広げる努力をして欲しい。言うまでもないが、ニューヨーク、ロンドン、パリ等の世界都市もタブーに挑戦し、国民的議論を重ねていると聞く。

歴史的に抱えてきた課題に向き合い、安全で防災力の高い都市を構築するためにも、空の容量拡大、国際空港直結鉄道の整備、環状高速道路網の完成という3つの決着を目指す時期ではないだろうか。特に、空港は世界都市東京の生命線だが、ニューヨークの半分以下、他の世界都市に大きく見劣りする容量を、もはや土木工事だけでは増やせない。横田空域返還と市街地上空経路の活用に関する国民的議論とオリンピック期間中の実施を検討し、その後の空港再拡張に立ち向かうべきだろう。空港鉄道に関しても、国際競争力向上のため、立地の悪さを補う成田から都心への短絡線や副都心方面から羽田への広域の連絡線など、従来から検討されてきた短区間の効果的整備を、事業者間の連携のもと進めることが期待される。環状道路については、外郭環状と横浜環状を活用した一定程度リダンダントなネットワークが先に実現できるので、外環東名以南という最終区間について、その必要性を広く共有する計画づくりがまず求められる。ついでに一般道路では、パラリンピック招致を考えれば、歩行者の安全最優先を徹底し、歩道から速い自転車を一掃すべきだろう。細かなことだが、自歩道の視覚分離のように歩道上自転車に優遇する愚策は、歩行者の多い場所では可能な限り排除したいものだ。

さて、最近の日本でスポーツ以上に国民に感動や勇気を与えるものがあつたらうか。並外れた能力がありながら前を向き桁外れの努力を続ける人間の姿に誰しも感動し勇気を得よう。そんな多くの感動を身近で見せてくれることは嬉しいが、我々土木技術者はその実現の先を見据え、この機会に東京プロブレムの幾つかを克服する努力を本気でやりたいものだ。それが国民に感動を与えるような仕事ぶりであつたらなお良い。以上に示した効果的な事業で、次の時代の東京の有形無形の基盤を完成させる。その実現のため、多くの人々に理解され信頼される進めかたを設計することは可能であろう。早くから準備することを国や都に期待したい。そうであれば、どの検討場面にもバランスよく物事を俯瞰できる土木技術者が必要になるだろう。